

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 } 殿

福岡県農林業総合試験場長
(福岡県病虫害防除所)

技術情報第13号

キウイフルーツかいよう病の秋冬季防除について

キウイフルーツかいよう病 (Psa 3 系統) については、平成 26 年 4 月に県内で初めて発生が確認されて以降、防除対策に努めているところです。

本病原菌は比較的低温を好み、夏季は活性が低下しますが、10月頃から再び活性化します。落葉痕や傷口を侵入口として樹体へ感染するようになります。これらの侵入口を保護する観点から、収穫後、落葉後、剪定の前後を目安として定期的な薬剤散布を行い、発生の拡大防止に努めましょう。

1 対象作物名：キウイフルーツ

2 病虫害名：かいよう病(Psa 3 系統)

3 発生状況

平成 26 年は県内の限られた 1 地区での発生であったが、27 年は複数の市町で発生が確認された。両年とも、4～5月に発生が著しかった。

今年は前年 1 1 月からの暖冬によりキウイフルーツの樹液流動が早かったことに加え、1 月下旬に記録的な寒波が来るなど、寒暖差が激しかったことから樹体に亀裂が入り、県内の初発確認は昨年よりも早い 2 月中旬であった。この時期から、枝からの褐色の樹液の漏出 (菌泥) が複数の地域で確認された。

その後、4～5月に強風を伴う降雨が断続的に続いたことから、菌泥が周囲へ飛散し感染が助長され、中国系品種を中心に 4 月に入り葉の褐色病斑が発生した。また、昨年まで発生が見られなかった園でも本病が多発する事例が見られた。さらに、4 月下旬からはヘイワードでも確認されるようになった。

5 月下旬以降は、気温の上昇に伴い本病原菌の増殖が抑えられたため、6 月中旬以降では新たな発生は確認されなかった。

4 本病の発生生態

(1) 病原体

細菌 *Pseudomonas syringae* pv. *actinidiae* biovar 3

(2) 主な感染時期

- ・早春～初夏 (3～5 月)、秋～初冬 (10～12 月)
- ・増殖適温：10～20℃

(3) 感染経路

- ・樹体の接触による傷口感染
- ・ハサミなどの器具の使い回し

- ・罹病樹から採取した穂木の接ぎ木
 - ・罹病苗木の持ち込み
 - ・汚染された花粉の使用
 - ・土壌伝染については確認されていない
- (4) 発生しやすい条件
- ・春と秋の風当たりが強い
 - ・寒気が停滞しやすい
 - ・秋の冷え込みが早く春が遅い
- (5) 感染拡大の仕組み
- ・主たる感染源は罹病樹から流れ出す菌泥で、春や秋の強い風を伴った降雨により飛散する。葉や新梢から感染し、周囲の樹、園地へ拡大する。

5 防除対策

キウイフルーツかいよう病の秋季の症状は他の病害の症状と区別しがたいため、以下の対策を徹底し、感染を防止する。

特に今春の本病発生園地や周囲に発生園地があった場合等は、秋冬期の予防散布を徹底する。

- (1) 薬剤の定期的散布
- 収穫後、銅水和剤を定期的に散布する。
- (2) 健全な苗木、穂木を使い、菌を進入させない。
- (3) ノコ、ハサミなどの作業器具の消毒
- (4) 生垣やネットによる防風対策